

会員が抱える問題 ～総合管理部門アンケートより～

三谷 典映（奈良県立医科大学附属病院）

医療制度改革をはじめ、診療報酬の改訂・包括化、DPC 導入等、最近の医療情勢はますます厳しさを増し、臨床検査を取り巻く環境が大きく変化しつつある。また、職場の中においても検査室は利益部門からコスト部門へと姿を変えたと言われ、またブランチラボ等のアウトソーシングの波が押し寄せ、その存在が危ぶまれるようになってきた。技術革新・中央化により大変な進歩を遂げてきた臨床検査の分野であるが、自動化・IT化により合理化され、皮肉にも検査技師の存在を薄れさせる結果となったようにも思える。このような状況の中、現場の最前線で働く技師が日頃どのように現実を捉え、日々職務を行っているのかを把握し、臨床検査の将来のあり方を探る一助にするために検査総合管理部門としてアンケート調査を実施した。

【アンケート】

アンケートは、平成 15 年 5 月に奈良県内の技師会会員全員を対象に調査用紙を配布し、無記名にて行なった。内容は 個人基本情報（年齢、性別、経験年数、担当分野、検査技師を選んだ動機） 現在の職務の状況 検査技師の将来の見通しについて 検査技師の業務拡大について 総合管理部門への意見・要望について 以上の事項について、選択および記述方式にて回答を求めた。なお、 についてはアンケートの時期が、総合管理部門が研究班として発足して間もない頃であったことから、今後の研究班活動の参考にするべく設けた問いである。

【対象】

調査対象 486 名のうち 236 名の回答を得た（回収率 48.6%）。男性 36%女性 64%。年齢は 30 歳代・40 歳代が比較的多かった。

【仕事についてやりがいを感じる時】

「仕事についてやりがいを感じるか」を尋ねると、感じると答えたのが 64% で、感じないと答えた 2

2% よりはるかに多く、やりがいのある職種であることが改めて感じられた。やりがいがあると答えた方にその理由を尋ねると、異常データ等が診断に役立ち、臨床に貢献できたときなどをあげたのが最も多かった。あるいは、毎日の職務を確実にこなし、正確な検査を遂行できたときの充実感にやりがいを感じていることもわかった。また、特に生理機能検査や採血などの分野では、患者さんとのかわりの中で、やりがいを感じているようである。

【やりがいを感じないところ】

しかし反対に、やりがいを感じないと答えた方が 22% あったのはどういう事に起因しているのだろうか。年齢では 30 歳代・40 歳代にやりがいを感じていないという回答が多かった。その原因を尋ねたところ、業務の単調さをその原因に挙げる方が多くあった。検体検査などでは機械化が進み、そのオペレーション的な仕事を中心となってきた背景があると思われる。また、「業務が自分の性格に合わない」や「興味がわからない」などの回答もあった。その他の意見としては、「忙しすぎる」、「検査以外の雑務が多い」、「検査内容が充実していない」などの意見があった。

【技師の将来】

技師の将来の見通しについての問いには、「大変不安」・「やや不安」という答えを合わせると 82% にのぼり、「明るい」と答えた方はなかった。かなりの方が将来に不安を感じていることがわかった。不安の原因と思われるものを尋ねると、医療情勢の悪化、検査の外注化、合理化・効率化が求められているからという意見が多く、存在価値の低さや、技師側のプロ意識の低下などをあげる意見もあった。

【将来の不安に対してどういった努力が必要か】

その不安に対してどういった努力が必要かを尋ねると、より専門的な知識を持つなど技師のレベルアップ

会員が抱える問題 ～総合管理部門アンケートより～

三谷 典映（奈良県立医科大学附属病院）

を目指す、臨床側に必要とされる検査室作り、検査の必要性をアピールし、技師の存在価値を高めるといった意見。また、臨床側とコミュニケーションをとり真のチーム医療・診療支援を進めるような業務拡大を考えるとといった意見があった。

臨床検査は今や医療の中ではなくてはならない存在であり、患者様への貢献度も高く遣り甲斐のある仕事であることは皆の認めるところである。しかしながら、その仕事をしている検査技師の立場を考えると、法的な拘束力もなく世間の認知度も低く、合理化の推進と相まって職場での存在価値が低下していると感じている会員も多い。このような状況の中、どうすれば現状を克服し、生き残りを図り、更なる検査技師の発展につなげられるのか。

このパネルディスカッションが企画されたのも、このような臨床検査技師のおかれている今の状況を反映してのことであろう。当日は、アンケートにおける会員諸氏の生の声をお示ししながら会員のいま抱える問題について考えてみたい。